
biohazard **B S A A**

シルバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

biohazard B S A A

【Nコード】

N 3 1 4 5 J

【作者名】

シルバー

【あらすじ】

ラクーンシティ壊滅事件から約11年、アフリカでのバイオテロから約1年の月日が流れ、この世界からはいまだにバイオテロの脅威は去っていないかった。対バイオテロ組織・BSAA北米支部の日本人隊員ユウキ達エコーチームは生存者を救出するため、バイオテロの発生した街に乗り込む。そこで彼らが目にしたものとは――

オープニング（前書き）

この小説を読むにあたって、覚えておくとよい単語。

バイオテロ——生物兵器を使ったテロのこと。

B S A A——バイオテロを鎮圧させるための部隊。主人公達はこの組織に所属している。

プラーガ——バイオテロに用いられる寄生生物。これに寄生された人間は凶暴化してしまう。

ガナード——プラーガに寄生された人間の呼称。

B・O・W——生物兵器の略称。

クリス——B S A Aの凄腕エージェント。彼の報告書が情報元になったりする。

レオン——アメリカ大統領直属エージェント。同じく彼のレポートが情報元になったりする。

オープニング

十年前は誰も信じなかった。

アメリカのある街、ラクーンシティ。その郊外の森に存在する洋館に生ける屍——ゾンビがいるということを。

洋館で行われていた実験で生み出された数々のおぞましい生物兵器。その脅威を実際に目の当たりにした警察の特殊部隊、STARSの生き残りはそれを報告した。

しかし、人々は否定した。そんなことがあるワケがない、と。

その数ヶ月後、ラクーンシティは生ける屍で溢れかえった。

勿論原因は洋館で開発された“Tウィルス”と呼ばれる、人々をゾンビへと変える死のウィルス。

それが街に蔓延し人々はゾンビとなり、新鮮な肉を求めて街をさまよった。

STARSの隊員は一人を除いて全員脱出していた。

その数日後、核ミサイルによって街は地図から消えた。

S T A R Sの生き残り達は事件の元凶である製薬会社——アンブレラへの復讐を誓い、行動を開始した。

その五年後、ロシアにあったアンブレラの研究施設をS T A R Sの生存者達が強襲。その際に流出した生物実験の資料が証拠となり、製薬会社アンブレラは崩壊した。

しかし生物兵器の恐怖は終わらず、アンブレラの所有していた生物兵器はテロリスト達の手に移り、テロリスト達は生物兵器を用いた“バイオテロ”を起こす用になった。

それを対処するべくS T A R Sの生き残り達で設立したアンブレラ対策の私設部隊は、世界各国の協力を得て対バイオテロ組織である“B S A A”を設立。

その後大統領直属エージェントでありラクーンシティの生き残りであるレオンの“レオン・レポート”や、B S A Aの英雄で元S T A R S隊員のクリスの報告で“ブラーガ”という寄生生物の存在が発

覚。

このプラグを用いた強力な生物兵器が作られるようになった。

この世界にはまだ、安息は訪れそうにない。

オープニング（後書き）

次回から始動です。

この小説は、基本的にバイオハザード5を元に行っているため、武器はすべてバイオ5の物を用います。

敵も基本バイオ5ですが、4のを採用するかもしれませんし、オリジナルB・O・Wなんかも出すかもしれません。

m i s s i o n o ・ユウキ・サトウ（前書き）

文章に自信はありません。以上

missiono・ユウキ・サトウ

ラクーンシティの事件から約11年後

2010年5月

アメリカ B S A A 北米支部

シャツ、シャツ、という刃を研ぐ音だけが部屋の中で響く。

ベッドに腰掛けて雑誌を流し読みしている男は、もう一人の男に声をかける。

「おい」

部屋の中央でナイフを研ぐ男はその声で雑誌を持った男の方を振り向く。

「なんだ？」

雑誌を持った男は大きく欠伸をしてこう言った。

「暇だな」

「…………だな」

男はナイフを研ぐのをやめ、その刀身を布で丁寧に磨く。

綺麗に磨かれた銀色の刀身に自分の顔が映り、なんとなく自分の顔に微笑する。

黒の短髪、同じく黒い瞳。お世辞にも美形とは言えないがそれなりに整った顔をしている。

彼の名はユウキ・サトウ。国籍は日本。
漢字で書けば“佐藤悠輝”である。

ユウキはナイフをしまい、雑誌を持った男の方を振り返ったと同時にユウキの顔面に雑誌が激突する。

「痛っ！？何すんだケイン！」

ユウキは雑誌の命中した鼻を押さえながら床に落ちた雑誌を拾い上げる。

雑誌男——ケインはそれを見て笑いながら言う。

「ユウキ、暇つぶしに俺の雑誌貸してやるよ」

ユウキは拾った雑誌をパラパラとめくり——それをゴミ箱へ放り投げた。

「おまつ、人が親切に貸してやった雑誌を！」

「エロ本しか持っていないのかてめーは!!」

ベッドから勢いよく立ち上がるケインを指差しながらそう返すユウキ。

ケインの投げた雑誌がアレな本だったからだ。

「エロ本で悪いか！俺はエロ本しか持っていないんだよ!!」

ゴミ箱へ急行してエロ本をつまみ上げながらそう言うケインを見て溜め息をつくユウキ。

と、ガチャリというノブの回転する音と共にユウキの後頭部に痛みが走った。

「……何騒いでるんだお前らは」

ユウキが入り口のドアを見ると、そこには片手で持った拳銃の銃口をユウキに向けている男がいた。

中性的な顔立ちと長めの黒髪で女ととれなくもないが、引き締まった体がそれを否定している。

「ユウキが俺の雑誌を——」

「うるさい」

ケインが喋り出すがその男はそう呟いて拳銃の引き金を引いた。

パンツという音と同時にケインが額を押さえる。

「痛っ！？待て、撃つなって！！」

ケインはよろめきながら手を前に出して男を止める。

男は拳銃——もといエアーガンをゆっくり下げると、もう片手で持っていたファイルから数枚の紙を抜き取った。

「ユウキ、ケイン。こいつに目を通しておけ」

ユウキはエアーガンで撃たれた頭をさすりながらそれを受け取る。

「これ、何の資料だ？」

「クリス・レッドフィールドのアフリカでの任務の報告書のコピーだ」

「！！！！」

クリス・レッドフィールド。このBSAA北米支部に所属し、数々のバイオテロと戦ってきた英雄とも呼ばれる男。

その彼の戦歴の中でも有名な去年のアフリカでの任務の報告書とあって、ユウキとケインはその資料をまじまじと見る。

「プラーガ・タイプ2、タイプ3や新種のB・O・Wについて記されている。今後役に立ちそうだったからもらってきた」

素っ気なくそう言うエアーガンを持った男のベルトに吊されたドッグタグがチャリン、と音を立てる。

ドッグタグとは金属製の名刺のような物。たとえ自分の遺体が判別不可能になるまで破壊されても判別できるよう、隊員には携帯が義務付けられているのだ。

ドッグタグに刻まれている“Allen”の単語。彼の名はアレン。

「それ一通り見たら仮眠とおけよ。いつ出勤要請がくるかわからないから」

アレンが自分のベッドにゴソゴソと潜りながら、その場で一心不乱に資料を読む二人にそう言った。

ユウキは報告書のある一つの項目に目を止めた。

「ウロボロス——ウイルスによる遺伝子変化に宿主が耐えきれずに暴走した姿。ヒル状の黒い触手が宿主を覆い尽くしており、無差別に人間を襲い続ける。炎に弱い、並の火器では対処できない程の耐久力を有する——」か

ユウキが読み上げると同時に隣にいたケインは資料を二つ折りに畳む。

「やっぱり、資料だけじゃわからねーよな。実際にこの目で見ないと」

「資料なんてそんなもんだろ。まあ、こんな化け物想像もできないけどな」

ユウキも資料を畳みながらそうケインに返した。

ケインは積まれた雑誌の上に資料を置き、ベッドに転がる。

ユウキは近くの棚の上にナイフと資料を置き、同じく自分のベッドに転がった。

（ウロボロス、か。クリス・レッドフィールドの戦った怪物、一度見てみたいよ）

数秒後に部屋は暗闇と化し、ユウキの意識もその闇に沈んでいった

missiono・ユウキ・サトウ（後書き）

簡易説明

ユウキ・サトウ

Age 22

主人公。日本人でナイフの扱いに長けている。サバイバル能力は高い。黒髪で短髪。

ケイン・ロビンソン

Age 23

工口本男。狙撃が得意で様々な銃器を扱える。金髪で短髪。

アレン・コール

Age 23

中性的な男（見た目）。冷静沈着だったり。身体能力が高い。黒髪で長髪。

こんなもんか。

次話も今日中に更新する予定です。

mission1 バイオテロ発生（前書き）

今日三回目の更新

mission 1 - バイオテロ発生

「おいユウキ！起きろ！」

部屋に響いたその声で目を覚ましたユウキは、眠そうに目をこすりながら体を起こす。

すると、BSAAの迷彩服に着替えているアレンが目に入り、ユウキの意識は一瞬で覚醒した。

「バイオテロか！？」

ベッドから飛び起きて棚に置いてあるナイフを掴みながらアレンに呼びかけるユウキ。

すると、同じく着替えているケインがアレンの代わりに口を開く。

「ああ、アメリカの海沿いにある“スガリスシティ”とか言う街でバイオテロが起きたらしい。詳しくは知らねーけどな！」

ユウキは無言で頷くと、ロッカーの中から自分用の迷彩服を取り出し、素早く着替える。

そしてよく研いだサバイバルナイフをベルトに引っ掛け、準備完了。

「行くぞ」

アレンの言葉にユウキ、ケインの2人は頷くと、部屋の鍵を閉めてヘリポートへと走り出した。

B S A Aは出勤要請を受けてから12時間以内に部隊を展開させることになっている。そのため、要請後即出勤なんてことも有り得るのだ。

今の状況がまさにそれである。

ヘリポートに到着したユウキ達やその他のB S A A隊員に、標準装備である支給品のS I G 5 5 6、M 9 2 Fという二つの銃器が配られる。

S I G 5 5 6はアサルトライフルという種類の銃であり、連射性能に優れている。

M 9 2 Fはハンドガン、つまり拳銃であり、サイレンサーが取り付けられているため、銃声が響かない。反動も小さく、扱いやすい銃である。

そしてその銃器のマガジン、手榴弾などの武器を隊員達は受け取り、幾つかは腰のマガジンベルトに突っ込んで残りは腰のバッグに入れ

る。

SIG556は背中のホルスターに下げ、M92Fは腰の拳銃用ホルスターに収めた。

今回出動するのはBSAA北米支部のアルファ、エコーチームの二チーム。

一チーム六人で構成されているため、全12人が今回のバイオテロに赴くことになる。

ちなみにユウキ達はエコーチームの隊員だ。

「バイオテロの説明はヘリで行う！各自武装を整え次第乗り込め！」

隊員達の前で、いかにもベテランそうなアルファチーム隊長の中年男が声を張り上げ、それに返答してヘリに乗り込む。

「なあ」

と、ヘリに乗り込む前にケインがユウキに話しかけてきた。

プロペラの回転音で聞き取りにくいが、ユウキは耳を傾ける。

「こんな装備で大丈夫なのか？」

ケインは不安げにそう言った。

対人戦ならばアサルトライフル、ハンドガンだけで充分だが、相手は生物兵器。どんな化け物が来るのかわからないのだ。

それに、昨晚の報告書に書かれていたB・O・Wがさらに恐怖を煽っていた。

「大丈夫だってケイン。今回はそんなに強いのはこないさ。リラックスして行こうぜ」

ユウキはそう言ってケインの肩をポンポンと叩き、ケインの背を押してヘリに乗り込んだ。

全隊員が乗り込んだ事が確認されると、二つのチームを乗せた人員運送用の大きなヘリが宙に浮き、スガリスシティへと飛び立った。

ヘリが飛び始めてから数分後、ユウキ達は窓際のイスに座り、他の隊員と共にエコーチーム隊長の任務内容の説明に耳を傾けていた。

すぐ隣では同じことをアルファチームもやっている。

ユウキ達が隊長から聞いた話によると、既に街の周りにはバリケードを敷いて街を隔離しているらしい。

さらに人間が凶暴化しているという証言から、寄生生物プラーガによるバイオテロだと推測されている。

ちなみにプラーガとは、寄生した生物の脳や脊髄を支配し、体を乗っ取る寄生生物である。

通常は種を植え付けて孵化させないといけないため時間がかかるが、タイプ2と呼ばれるモノは口から成長体をつ込むことですぐさま寄生させることができるため、今回はおそらくこの“タイプ2”なのであろう。

プラーガに寄生されると凶暴化し、同じ寄生体以外に攻撃してくるのだ。知能も残るようで、鈍器や刃物などの凶器で襲ってくる場合もあるため危険なのである。

しかしユウキ達隊員はプラーガについてあまり知らない。プラーガに寄生された人間——ガードに遭遇したこともなく、プラーガによるバイオテロ自体が少ないので、情報もあまりないからだ。

「以上で説明は終わりだ！何か質問ある奴いるか？」

エコーチーム隊長のスキンヘッドで筋肉質の男がそう言って周りを見渡す。

しかし質問する隊員はおらず、皆装備の最終チェックを行い始める。

今回の任務を簡単にまとめるならば、“生存者の救出”だ。隔離された街に取り残された生存者を救出し、撤退する。それが主な目的となる。

おそらく撤退後に街は地図から消えることになるだろう。11年前のラクーンシティのように、汚染された街を残すことは危険だから。

「今回は二人一組のツーマンセルで行動してもらうことになる。組み合わせは——ジョセフ、ケイン。アレン、ユウキ。モーガン、俺だ。すぐに街上空に到着する。各自降下準備を整えろ」

隊長——スミスからの声で降下用の装備をセットする。
街への潜入はヘリからワイヤーを伝っての降下になる。地上から街に潜入するのはバリケードを崩すことになるからだ。

ユウキはパートナーであるアレンと共にワイヤーに手を掛け、悪夢の街へと滑り降りていった。

mission1 - バイオテロ発生（後書き）

これで設定は整いました。あとはキャラと敵を動かすだけ。
ゲーム版バイオハザードから誰か登場させてみたい気がします。

それと、これから度々“レオン・レポート”と“クリスの報告書”
は出てきます。B・O・Wの説明の際に使いやすそうですので。

mission 2 - 血に飢えたガナード

ワイヤーを滑り降り、ユウキとアレンは街の通りに着地した。

ユウキはすぐにM92Fをホルスターから抜いて辺りを見渡す。

——何もいない——

ユウキはその異常な空気に気圧されながらも、敵が見えたらすぐに発砲できるようスライドを引いて初弾を装填する。

隣にいるアレンは耳に着けるタイプの通信機——インカムを弄り、報告をする。

「こちらエコー2。敵影無し。行動を開始する」

『こちら本部。了解。幸運を祈る』

本部からの応答を聞いたアレンはインカムを切り、ユウキと同じくM92Fを抜いて初弾を装填。警戒しながら歩き出した。

「敵は……いないな」

壁に張り付きながら曲がり角の通りに銃口を向けて咄く。

「静かだな」

アレンが後ろを警戒しながら言い、ユウキは頷く。

「イヤな空気だ」

ユウキは銃口を前方に向けたまま、周囲の家の窓やドアにも注意を向ける。

「うわああああ！！！！」

「！！！！！」

その時、突然右側の家から悲鳴が響いた。

「ユウキ！」

「分かってる！」

アレンの声に頷きながらユウキはその家のドアにタックルして突入した。

ドンツという鈍い音と共に家の中に飛び込んだ2人は素早くM92Fを構えるが、そこには白い壁の廊下で何もいない。

「奥だ」

アレンはそう言って廊下の曲がり角を走り抜け、M92Fを構えた。
ユウキもそれに続いて銃を構える。

ソファーやテレビがあることから、ここはおそらくリビングなのだろう。そこに2人の男がユウキとアレンに背を向けて立っていた。

「何をしている！」

アレンが銃口をその男の1人に向けながら前に出る。
すると、それに応えて2人の男は振り返った。

その際、ユウキには男で隠れて見えなかったモノが見えた。
男達の足元には、ズタズタになった人間らしき物体が転がり、周囲には血や肉片が散らばっていて――

そして2人の男は、包丁と鉄パイプを手に使っていた。

「こいつらがガンナードか!!」

ユウキはそう叫ぶとM92Fのトリガーを引いた。

パスッというサイレンサーで抑えられた発砲音が鳴り、発射された弾丸がガンナードの胴体を貫く。

しかしガードは気にすることなく鉄パイプと包丁を構えた。

「よそ者め！」

「ズタズタにしてやる！」

ガード達はそう言い放ち、2人に襲いかかってきた。

「こいつら、言葉を使えるのか！凄いやな！」

アレンはそう言いながらM92Fのトリガーを連続で引き絞る。

放たれた弾丸はガード達の体に着弾し、肉片を撒き散らす。ガードは少し怯んだだけだった。

「チツ！無敵かお前は！」

ユウキは舌打ちしながら包丁を持ったガードの右足を打ち抜くと、ガードは足を押さえて呻きだした。

「隙有り！」

ユウキは右手を銃から離し、その右手で腰のサバイバルナイフを抜いてガードに接近。ナイフを怯んでいるガードの首筋に突き立てた。

「一丁上がり！」

ユウキは白目を剥き、口からゴボゴボと血を垂れ流すガナードからナイフを引き抜いて笑みを浮かべる。

その時、アレンがユウキに銃口を向けた。

「伏せる！」

ユウキは言われるがまま体制を落として床に伏せると、ユウキの頭上を勢いよく鉄パイプが通過する。

アレンはユウキの後ろにいるガナードに狙いを定めてトリガーを引いた。

飛び出した弾丸は綺麗にガナードのこめかみを撃ち抜き、ガナードの頭から血をまき散らせた。

「あ、危ねえ」

「接近するなら警戒しろ。頭割られる所だったんだぞ」

冷や汗をかきながら立ち上がるユウキに冷静にそう言うアレン。

アレンはそのまま床に転がるズタズタの死体のチェックを始める。

「まだ死んで間もないな……おそらく、さっきの悲鳴はこの人のだろっ」

「鉄パイプと包丁でズタズタかよ……狂ってるんじゃないぜ」

直に触れないようM92Fの銃身で死体を探るアレンの後ろでユウキは鼻をつまみながらインカムを弄る。

「こちらエコー2、ユウキ。ガード2体と交戦し、双方を射殺した。恐らくまだ街の中に多くが潜んでいる模様」

『了解。充分に警戒して続行してくれ』

報告を終えたユウキがインカムを切ると同時にアレンが立ち上がる。

「この様子だと、生存者は殆どいないだろうな」

アレンの言葉にユウキは頷く。

「行こうぜ、少ない生存者が生きたまま俺達を迎えてくれるうちにな」

ユウキは布でナイフから血を拭き取り、鞆に収めながらそう言った。

mission2 - 血に飢えたガード（後書き）

今回の話でストックは使い切りました。

しかも、これからどう進めるか大まかにしか決めてないので、次回更新は未定です。

やっとガードに遭遇ですね。これからの執筆が楽しくなりそうです（笑）

評価・感想・意見・質問など、よろしくお願いします。
この4つが作者の原動力ですのでw

m i s s i o n 3 プラーガ・タイプ3 (前書き)

少し短いです。

mission3 - プラーガ・タイプ3

「敵は………いないな」

扉を開けて銃口をあちこちに向けながらユウキは言う。

「おかしいな。どこかに集まってるのか？もう5軒目だぞ？」

アレンがユウキに続いて部屋に入りながらそう呟く。

ユウキ達はガード2体を射殺した後、生存者を探して民間を回っているのだが、全く人影が無いのだ。

ユウキは安全を確認して溜め息を吐くと、部屋の中に手掛かりとなる物はないか物色し始めた。

「まったく……この街で何が起きてるんだよ………生存者はともかく、ガードもないなんておかしいだろ」

アレンも頷きながら手近にあった机の引き出しを開けて物色する。

「……………ん？」

「どうした？」

アレンの声でユウキは振り向くと、アレンは引き出しの中から何かを引っ張り出した。

「……………なんだそれ？」

ユウキはアレンが見つけた黒い冊子のような物を見て首を傾げる。

アレンはその冊子を開き、パラパラとページを捲り、最後の数枚で止めた。

「住民の日記だ。二十歳くらいの社会人の物みたいだが……………」

アレンはそれを机に置くと、ユウキにも見るように促す。

ユウキは机に歩み寄り、その上に広げられた日記を覗き込んだ。

5月7日

今日、この街に流行中の新型インフルエンザの予防接種の物資が届いたらしく、仕事場の皆で予防接種を受けるために病院に行ってきた。

だが、まだ女性用のは届いていないと言われて女達は予防接種を受けられなかった。男にしか効かないモノなんてあるのか？

5月8日

なんだか、体がソワソワする。同僚の男達も皆似たようなことを言っていたし、しかもイライラしてる奴もいたな。

いつも大人しいサートンの野郎なんか肩がぶつかっただけで怒鳴りやがったからな。びっくりしたぜ。

5月9日

なにもかもがむかついてしょうがない。ライアンとデニスは職場で殴り合いのけんかをはじめやがったから皆でとめた。

それから、自分たちのいじょうにきがついて、病院にまたいつてみた。そしたら医者があとで薬をおくるといつていた。はやく届いてほしい。

5月10日

きょうは出勤せずに、うちですぐすことにした。いまだれかにあったらボコボコにしてしまいそうなほどいらだっていた。そしたら昼ごろにダンボール箱がとどいた。

中をあけてみたら、いくつもビンが入っていて、中できもちわるい

ものが動いていた。

入っていたメモには、これをつかえとかいてあった。

5月11日

なんだかたのしいきぶん。あばれてやろう、がまんしたくない
きのうきたびんをなんこかもつ
これでみんなたのしくなる

日記はそこで途切れていた。

「……タイプ3にタイプ2を持たせて感染させていたのか……」

アレンは顎に手を当てて考える仕草を言う。

ちなみに、タイプ3とはタイプ2より身体能力が向上する代わりに
男にしか定着しないプラーガである。

「ユウキ、この街には間違いなくガナードの強化版がいる。慎重に進むぞ」

アレンが日記をバックにしまいながらユウキにそう言い、インカムに手を掛ける。

「こちらエコー2、アレン。使用されたブラーガはタイプ2、タイプ3だということが分かった。それに病院に何か手掛かりがありそうだ」

アレンはそのまま、日記にあったことに関する報告を続ける。

すると、アレンの声に混じって何かの音がユウキの耳に届いた。

「ん？」

ユウキは注意して耳を澄ます。

何やら遠くから聞こえてくる小さな聞き覚えのある――弾丸の発射音、銃声。

「了解」

報告を終えたアレンは通信を切ってユウキの方を振り向くと、ユウキはM92Fをしまつて背中に背負っていたSIG556を手にした。

そして緊張した表情でユウキは口を開いた。

「アレン、アサルトライフルの銃声が聞こえた」

ユウキの一言でアレンは理解した。

M92Fでは対処できない状況に陥っている隊員がいる。

「間違いなくB・O・Wかガナードの大群だな」

アレンも同じくSIG556を下ろし、初弾を装填する。

「行くか？」

「当然」

ユウキの確認にアレンが頷くと、民家を飛び出し距離のある銃声を頼りに走り出した。

mission 4 - 変異型との戦闘

「ぐああああー!!」

「リチャード! クソッ、何なんだこいつ!」

B S A Aアルファチームの隊員、グランは先程まで生きていた相棒の隊員の死体を見て恐怖を抱きながらもS I G 5 5 6を目の前にいるバケモノへと連射する。

「弾薬を惜しまずに撃ち続ける! コイツは手強いぞ!」

グランの横で別の隊員もS I G 5 5 6を連射し続ける。

現在生きている三名の隊員は必死で撃ち続けるが、そのバケモノは怯まず右手に握った二メートル程の鉄パイプを振り上げながら突進してくる。

それはおそらくガードなのだろう。三メートル程の身長を別とすれば。その顔は鉄製であるう仮面に覆われており、腰に布を巻いただけの男の巨人だった。

「ひいつ……」

向かってくる巨人ガードに発砲を続けるもその巨人は鉄パイプを

隊員の一人に振り下ろし、グチャツという鈍い音と共にまた一つ命が散る。

「この野郎！」

グランは巨人の背後に回りSIG556のトリガーを引き続ける。が、すぐに弾を撃ちきってしまった。

「リロード！」

グランは叫びながら後退しつつ空のマガジンを抜き、新たなマガジンを叩き込む。

その隙を隣の隊員がカバーしようと弾幕を張るが、巨人ガンナードはものともせず鉄パイプをグランに振り下ろす。

「くっ！」

リロードを終えた直後のグランは咄嗟にSIG556を掲げるが、鉄パイプを受けたSIG556は真ん中からへし折れてしまった。

その打撃の衝撃で怯んだグランに巨人ガンナードは前蹴りを繰り出し、グランは吹き飛ばされてしまう。

（く……応援に来たのが間違いだったか……）

グランは強烈な一撃で朦朧とする意識の中そう後悔する。

実はグラン、発砲音を聞きつけて加勢するべくパートナーとここに来たのだ。

しかし元々戦っていた隊員はすでに死に、駆けつけた二チームもグランともう1人の隊員以外は巨人ガナードに殺されてしまった。

「ぎゃっ……」

グランは聞こえた声の方へと顔を向けると、もう1人の隊員の頭がグチャグチャになっているのが見えた。

そしてその死体の前には血の付着している鉄パイプを担いだ巨人ガナードが。

「死んでたまるか……」

グランは衝撃で麻痺して震える手でM92Fを腰のホルスターから抜くが、上手く狙いを定めることができない。

巨人ガナードはグランに注意を転じ、グランの元へ歩み出そうとしたとき、その右足を弾丸が貫く。

巨人ガナードが振り返ると、そこには新たに戦いに加わろうとしている二人の隊員——ユウキとアレンが銃を構えていた。

「でけーな、俺達の二倍はあるぜ」

ユウキは敵の予想以上のサイズに驚く。

「おそらくタイプ3の変異型だ。コイツが幾つものチームを壊滅させたのか……」

アレンは巨人ガナードの周辺に転がる無残な隊員達の亡骸を見て呟く。

「まあ、今更逃げられるワケねーよな。やってやるぜ」

ユウキがSIG556で巨人ガナードに狙いをつけ、発砲し始めるとアレンもそれに続きSIG556のトリガーを引き絞る。

「フルオオオオオ!!」

巨人ガナードは奇妙な雄叫びを上げ、ユウキ達に向かって走り出した。

「アレン、右足から崩す!」

「OK!」

ユウキの指示に従いアレンも巨人ガナードの右足へと弾丸を集中さ

せる。

右足に連続で突き刺さる銃弾の勢いに押され巨人ガンードは少しだけよろめくが、再び雄叫びをあげ、大きくジャンプした。

「うおっ！」

ユウキは飛びかかってきた巨人ガンードを視界に捉えると同時に横に転がる。

次の瞬間、先程までユウキの立っていた場所に巨人ガンードの鉄パイプが強打された。

ガン、という音とともに舗装された地面が碎かれ、反動で鉄パイプの先端がへこむ。

「あれを食らうのは避けたいな……」

アレンはその破壊力を目にして少しでも表情が青ざめるが、すぐにSIG556を構え直し、後退りながら右足を狙い撃つ。

すると、集中攻撃に右足が耐えきれなかったのか巨人ガンードがガクツと右膝をついた。

「よし！」

それを見たユウキは腰のサイドバックから支給されていた手榴弾を

一つ取り出した。

「離れるアレン！」

ユウキは動きを止めた巨人ガンナードから離れつつピンを抜き、その足元へとそれを放った。

ユウキとアレンはすぐさま地に伏せ、その数秒後に爆音が響く。

爆発の衝撃が和らぐと同時に二人は立ち上がって銃口を爆煙の立ち込める方向に向ける。

徐々に晴れていく煙の中心部には、右足の消失している巨人ガンナードがいた。

ユウキは目を凝らすと、その近くにズタズタになって焦げている大きな足のような物を確認できた。

「よし……これで機動力は奪えたな」

アレンはふうつと一息つき、残弾の少ないマガジンの交換をする。

「いや、まだ片足と腕は付いてるんだ。油断大敵だぜ？」

ユウキも空に近いマガジンを新しいものに取り替えようと腰のベルトに手を伸ばす。

その時、突然目の前の巨人ガナードが片足だけで跳躍した。

「何!？」

巨人ガナードはユウキの目の前に着地。同時に鉄パイプを横薙に振るう。

ユウキはSIG556を盾にしてガードするが、片足でバランスがとれないとはいえ強力な一撃を完全に防げず吹き飛ばされてしまった。

「かはっ……」

ユウキの体は民家の壁に衝突。激痛が走り、口から少量の鮮血が吐き出される。

「くっ、まだ動けるのか!!」

アレンは一瞬で近距離に迫ってきた巨人ガナードに銃口を向けるが、すぐさま振り下ろされた鉄パイプで攻撃姿勢をやめて素早く回避する。

「予想以上の耐久力だな……これが変異型か」

立ち上がったアレンを待っていたのは再び唸りをあげて迫る鉄パイプ。

アレンは身を屈めてそれをかわし、接近して勢いをつけた回し蹴りを巨人ガンードの高い位置にある腰に放つ。

少し怯んだ巨人ガンードに銃口を向けて近距離で連射するが、巨人ガンードはものともせず鉄パイプを振りかぶった。

アレンは攻撃に備えて身構えるが、突然巨人ガンードの体がよろめく。

「舐めんなよ！」

ユウキが巨人ガンードの背中にタックルしていた。怯んだ巨人ガンードの背中にSIG556の銃口を突きつけ、引き金を引く。

が、SIG556はうんともすんともいわず、カチリというトリガーを引く音だけが鳴った。

ユウキはその銃身に入ったヒビに気付き、舌打ちして投げ捨てる。おそらく巨人ガンードの一撃で壊れたのだろう。

ユウキは腰のホルスターからM92Fを抜くが、既に巨人ガンードは体制を立て直して鉄パイプを振り上げていた。

しかし、ユウキの背後から響いた銃声で巨人ガンードの手から鉄パ

イプが弾きとばされる。

ユウキが振り返ると、少し離れた場所でSIG556を構えている隊員——グランと目が合った。

ユウキは無言でグランに親指を立て、目の前の巨人ガンナードに向き直りナイフを抜く。

そして全身の力を使い、ナイフを巨人ガンナードの残った左足に突き立てた。

「やれ！アレン！」

ユウキの声と同時にアレンはSIG556の銃口を膝をついた巨人ガンナードの後頭部に突きつけてトリガーを引き絞る。

タタタツという発砲音とともに、巨人ガンナードの頭蓋骨を突き破った弾丸がプラーガに支配された脳を掻き乱し、その生命活動に終止符を打った。

mission 4 - 変異型との戦闘（後書き）

評価・意見・感想よろしくお願いします。

今回登場した「巨人ガナード」。

これは、バイオハザード5の巨人マジニと同じと考えてもらえれば結構です。

バイオ5を持っていない方は、三メートルの細身で顔を隠した半裸の男をイメージしてください。

ちなみに、“エルヒガンテ”や“ンデス”とは全く違いますので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3145j/>

biohazard B S A A

2010年10月11日22時02分発行